

平成 28 年 度

中 学 校

入 学 試 験 問 題

国 語

45分

受 験 番 号		氏 名	
------------------	--	--------	--

○受験番号・氏名は解答用紙にも書くこと。

一

次の——線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

- 1 画家が銀座でコテンを開く。
- 2 河川かせんのテイボウの工事をする。
- 3 学校のキリツを守って生活をする。
- 4 彼はシユウシ無言だった。
- 5 五十メートル走のタイムをハカる。
- 6 よくコえた牛の体をさわる。
- 7 花見の余興で芸を見せる。
- 8 人の出自しゅつじを問わない。
- 9 予定の時間が大はばに延びる。
- 10 休んでから直ちに行動する。

二

次の①～⑤の——線部のカタカナを漢字に直した場合、ア～オのどの成り立ちになりますか、記号で答えなさい。

- ① 市場では品物をホウフに取りそろえている。
- ② 朝の日課のひとつにセンガンがある。
- ③ どこかで聞いたことのあるカシだった。
- ④ ジンゾウのダムに魚が泳いでいた。
- ⑤ 政府が出した案にサンピ両論の意見があった。

ア 上下が対になるもの (例・前後)
 イ 上下が似た意味を持つもの (例・樹木)
 ウ 上下が主語・述語の関係にあるもの (例・頭痛)
 エ 上の字が下の字を修飾する関係にあるもの (例・外国)
 オ 上の字がある動作を表わし、下の字がその対象や目的を示しているもの (例・読書)

〔例〕週末に仲間とトザンに出かけた。↓「登山(山に登る)」↓(答え)オ

三

次の①、②の文を、必要最小限の手を加えて、文の後の()にある条件にあてはまるような文にわかりやすく書きかえなさい。なお、必要最小限の書きかえについては、【例】を参考にしなさい。

【例1】三日前に私は小林さんと田中さんの家を訪ねた。(行ったのが田中さんの家だけになるように)

↓三日前に私と小林さんは田中さんの家を訪ねた。

【助詞(「と」「は」「に」「を」など)を変える】

【例2】母はさびしそうに田舎へ帰る祖母を見送った。(さびしいのが母であるように)

↓母は田舎へ帰る祖母をさびしそうに見送った。

【語順を変える】

↓母はさびしそうに、田舎へ帰る祖母を見送った。

- ① 誕生日に大きい花束とぬいぐるみをいただいた。(ぬいぐるみが大きくないものになるように)
- ② 3に4と7の2倍を足すといくつになりますか。(答えが21になるように)

四

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部改変しています。)

シゲばあさんは岩田滋乃という、ごく普通の、ちょっと古風で品良くも聞こえる名前をもっている。でも、ことぶき村の誰も「シゲノさん」なんて呼ばない。「岩田さん」ともめつたに呼ばない。普段は「シゲばあさん」だけれど、ときに、「^①がんじっこ」となることもある。ときに、ではなく、度々ある。

「あのがんじっこ婆あが」とか「どうしようもねえ、がんじっこじゃからな」と、多少苦々しげな口調とともに使われるのだ。

シゲばあさんほど、「がんじっこ」が似合う者はいない。岩田の岩は「いわ」ではなくて、「がんじっこ」の「がん」だと村のみんなはないしよ話の種にしている。

こうと決めたらたても動かない。他人の話を書かない。気に入らないと口もきかなくなる。まさに岩だ。

【中略】：役所の福祉課に勤める若い女性職員の金池さんは、上司から一方的に一人暮らしのシゲばあさんを訪ねるようにと命令された。そんな仕事の押しつけられ方に不満を感じながらも、反論することもないまま浹々従う金池さんだった。そんな金池さんを見て、シゲばあさんは、昔語りをし始める。シゲばあさんが若かったころ、夫(吉作)を戦地に送り出した後の話だ。戦争が終わり、戻ってきた夫の様子は以前と全く違っていた。帰ってきた夫を一目見るなり、泣かんばかりに喜んだ「おシゲさん(若かったころのシゲばあさん)」を、吉作は大声でわめきながら殴りつけたのだった。

「うるさい。おまえは、うるさい。」

吉作が吼える。獣の^{*1}咆哮だった。吼えながら滋乃を足蹴にする。髪をわしづかみにして、引きずる。

何が起ったか、滋乃にはわからなかった。

この人は鬼になったか。

^{*2}朦朧とする意識の中で思った。

この人は南の島で、鬼に変わったんか。

金池さんは生唾を飲み込んだ。風邪をひいたわけでもないだろうに、のどの奥が鈍く痛む。耳の底にも鈍痛があった。

「それで……ご亭主は、どうなったんですか」

「どうもなりやあせんといね。^②壊れただけよ」

「壊れた？」

「あん人は壊れて帰ってきたんや。前の亭主と同じ人間とは思えんかったな。突然、叫んで、うちに殴りかかってくるかと思いや、夜中におんおん泣き出す。母親が死んだと聞いても顔色一つ変えんがに、雀の死骸を見ても騒ぐうちゅう、ありさまやった。そうかと言って、まるつきりおかしいわけでもねえ。普通に飯食って、田んぼ仕事して、風呂に入る。けど……」

シゲばあさんの手が白い猫をなでる。金池さんの目の前を白い抜け毛がふわりと漂った。

「笑わんかったね。昔みたいに、笑うことも歌うこともなかったいね。めつたにしゃべることもなかったしの。そう……黙って、しゃがんどった。瞬きもせんと、自分の手のひらを見とることもあった。歌わんかったいね、帰ってきてから、祭りに顔を出すことさ、えいっぺんもなかった。なんやもう……うちには、同じ者とはどうしても思えんかったいの」

「なにが、あったんでしよう……」

「わからん」

「ご亭主は何も言わんかったですか」

「言わんかったいね。死ぬまで、自分が何を見たか、何をしたか、どうとう一言も言わずじまいで逝きおつた。言わんでも大方の想像はつくけどの……。想像は想像や。あん人しか知らん地獄がどんなもんやったか、ほんまんどこは、わからん」

ふいにシゲばあさんが手を差し出した。指の先に白い毛がついている。

「死ぬるとき、ここを握っての、^{*3}姑と同じこと、言った」

「生きろって？」

「そうや、シゲ、おまえは生きれて、の」

「シゲ、おまえは生きれ」

吉作は滋乃の手を握り囁いた。もう、ほとんど声は出なくなっている。病院のベッドの上だった。壁も床もカーテンも白い。死期の近づいた病人の顔だけがとす黒かった。

「生きれ……シゲ」

「おうよ」

滋乃は答えた。顔を突き出し、うなずく。

「生きたるがいよ。とことん生きたるがいよ。石にかじりついて、生きぬいたる」

吉作が微笑んだ。

昔、滋乃に惜しげもなく向けてくれた微笑だ。柔らかで、優しげで、美しい。③ 死の間際になって吉作はやっと昔の笑みを浮かべる
ことができた。しかし、その笑みは束の間で崩れた。

吉作の喉が鳴る。水が狭い穴に吸い込まれていくような音だ。目を見開き、全身を震わせる。その痙攣がおさまったとき、吉作はこ
と切れていた。

A

「うちは、一度、行ったことがある」

「南の島へ……ですか」

「そうや。あん人が何を見たんか知りとうて、出かけていった。なーんもわからなかったけどな。きれいな海があるだけや。ごっこつ
した黒い岩とジャングルと……暑かったがや。十二月やったに、暑うて、暑うて、虫がぶんぶん飛び回っておったな」

「なーんも、わからなかった……ですか」

どう答えていいか惑い、金池さんはシゲばあさんの言葉を繰り返した。

「亭主やて他人や。他人のことはわからん。わかっとるのは、自分のことだけや。うちかて、自分のことならわかる」

「何がわかります？」

金池さんはコタツの中でごぶしを握った。シゲばあさんの話に本気で耳をかたむけていると気がついた。義理ではなく、適当ではなく、
本気で聴いている。

④ 「バンザイ、や」

「はい？」

「うちがバンザイって叫んで、あん人を送り出したってことだけは、わかる。あん人は、それで、鬼を背負うことになって帰ってきた」

「けど、それは岩田さんが悪いんやないでしょ。みんな、そうだったんだから……」

「そうやな。みんな、そうやったいね。けど、それでも……うちは悔いとる。うちだけでも、うち一人でも、ずっと泣いておればよかった。
行ってほしゅうないと縫ればよかった。できたら、あん人と二人で逃げ出せばよかった。今なら、そうも思えるわいね。今さら思うても、
遅いけどな」

「けど、あの時代ってそんなこと不可能で……」

「できる、できんやない。やればよかったんや。見つかって、殺されても逃げればよかった。 X よりなんぼかマシやった

かもしれない。遅いやが。なんぼ言うても遅いやが」

「岩田さん」

「うちは、せめて亭主との、それに姑との約束を果たすんや。とことん生きてやるんや。がんじっこって呼ばれてもええ。嫌われてもええ。

自分のここんとここに」

シゲばあさんがごぶしで胸をたたく。

「ここんとここにある気持ちを偽らんようにするんや。そうやって、生きてやるんがいね。お棺に入ったあん人の死に顔見ながら、決め
たといね」

シゲばあさんが、少し首を傾げた。

金池さんは思わず目を瞬いてしまった。

目の前に座っている人が、柔らかな顔をした若い女性に見えたのだ。まっさらの紺を着た、まだ少女とも思える女性だ。とても初々
しい微笑みを浮かべている。

慌てて目をこする。

「ゴミ、入ったかや」

「いえ……」

皺だらけのシゲばあさんは初々しくも、微笑んでもいなかった。

「あんた、うちに似てるで」

「わたしが？」

「なーんも言わんと、言いたいことも言わんと、がまんして、それですませてしまう。嫌われるのや、除け者にされるのが怖くて、自分の思ったこと口にせんと、すませてしまう。優しいんやないで。臆病なだけや。卑怯なだけや。若えころのうちのように似とる。けど、金池さん」

名前を呼ばれた。背筋が伸びる。

「はい」

「あんた、いつまでもそのまま、おるんな？」

「それは……」

「あんたも、バンザイって叫んで、好いた男を鬼にするかや」

「それは……」

金池さんは背筋を伸ばしたまま大きく息を吸った。

それは、嫌だ。

「岩田さん、わたし……わたしも、がんじっこになれるでしょうか」

シゲバあさんは顎をあげ、金池さんを見つめた。じっと見つめた。それから、笑った。

にやりと、唇を曲げて笑った。

「がんばってみるんやな」

金池さんも笑ってみる。

にやりと……シゲバあさんのようにはいかない。年季が違うのだ。

風の音がする。雪交じりの風が吹きつけている。でも、コタツは暖かい。

⑤ 「がんじっこ」

金池さんは小さな、でも、しっかりと声で自分に呼びかけてみた。

(あさのあっこ『がんじっこ』)

(注) *1 咆哮……まるでけものようにほえること。

*2 朦朧……もやもやとして、実体の分からない様子。

*3 姑……夫の母親。

問一

——線部①「がんじっこ」は、「シゲバあさん」の性質を表す作者の造語です。その意味としてあてはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 頑固 イ 強情 ウ 意地っ張り エ 意地悪

問二

——線部②「壊れた」とありますが、吉作さんが「壊れた」のはなぜだと、シゲバあさんは考えていますか。四十五字以内で説明しなさい。

問三

——線部③「死の間際になって吉作はやっと昔の笑みを浮かべることができた」とありますが、それはどうしてだと考えられますか。その理由としてあてはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 昔、シゲバあさんに暴力をふるった記憶がうすれ、楽しかった生活だけが思い出されたから。

イ 自分の死の直前まで寄り添ってくれたシゲバあさんに感謝の気持ちを抱いていたから。

ウ 生きている間は口を閉ざそうとしていたことから、やっと解放されると思ったから。

エ 自分は先に死んでしまうが、シゲバあさんには幸せな人生を送り、長生きして欲しかったから。

問四

——線部④「バンザイ、や」とありますが、ここに込められたシゲバあさんの気持ちはどのようなものですか。解答らんに合うように三十字以内で答えなさい。

問五

——Xにあてはまる「ひゆ表現」を、本文中の——A——以降の部分から五字で探して書きぬきなさい。

問六

——線部⑤「がんじっこ」金池さんは小さな、でも、しっかりと声で自分に呼びかけてみた。」とありますが、この時の金池さんの気持ち、シゲバあさんの生き方にも触れながら百二十字以内で説明しなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部改変しています。)

南フランス、アルデシユ地方の山岳地帯で一九九四年、現存する人類最古の洞窟壁画が発見された。^{*1}劣化を防ぐため、研究者以外立ち入り禁止の措置がとられてきたが、ドイツ人の監督ヘルツォークは粘り強く交渉をつづけ、六日間だけの撮影を許可された。

^{*2}ラスコーは一万五千年前、^{*3}アルタミラは一万八千年前。それが、今回撮影された「シヨウヴェ洞窟」の絵は一気に倍近く、三万二千年前までさかのぼるといふ。

それにしてもどんな絵だろう、座りなおして考える。あのラスコー、アルタミラの牛たちより倍近く古いわけだから、こどもの落書きみたいな感じか、あるいは、シンプルな模様が、洞窟のあちこちにかわいらしく点在しているのかも。ヘルツォーク監督のことだから、はじめに発見のエピソードやインタビューで固め、物語の台座をつくった上で、じよじよに秘密をあかすように、肝心の壁画をみせてくれるんだろうな。

照明がおとされ、僕は椅子に沈みこむ。^{*4}驚愕した。

上映後三分で中腰になり(うしろには誰もいなかった)、そうして立ったまま、最後まですわることができなかった。映画の冒頭、いきなり惜しげもなく、洞窟壁画がスクリーンいっぱいにはびろがる、驚いたのはそんなことではない。^①馬が生きていた。揺れる灯火のなかに、むこうからやってくるまぼろしのように浮上した馬の首は、馬がその壁に顔をなすりつけたくらいに生々しい描線で描かれ、その輝く目、黒い瞳は、^②三万などという物理的な数字をややす越えて、たったいま、スクリーンに洞窟を通し、じつと僕の^{*5}内奥をみおろしていた。ライオン、^{*6}バイソン、トラ、サイ。つぎつぎと、絵巻物のように動物たちが浮かびあがる。そのどれも、カメラを向けられる^{*7}刹那まで洞窟の奥で息をひそめ、降り重なる闇をむさぼっていた。そうとしかおもえないくらいに精密で、荒々しく、はちきれそうな、生命の輪郭そのものをとらえた^{*8}デッサン。

^{*9}ドガはバレリーナを前に線を踊らせた。^{*10}狩野探幽は弟子にトラの皮を着せ筆をとった。シヨウヴェ洞窟の画家はモデルを前にスケッチなどできない。すべて、洞窟の外でみずからの目に刻みつけた像を、松明のもと、ゆれ動く壁に、瞳から、映写機の光を放つように描写していくほかなかった。その切迫感。その真実。皮膚の盛りあがりや角の張りをあらわすために、岩の凸凹も利用し、だからヘルツォークは、巨大なカメラをもちこんでまで^{*11}3D映像で撮りたかった。

十三種類の動物を二百六十点、穴蔵じゅうにちりばめた古代の画家は、調査によれば、集団でなく、たったひとりでこの画業をな

しとげた。洞窟の奥に画家の「サイン」が残っている。描き終えた興奮のあまりか、まるで躍りあがるかのように、あるいはからだからほとばしる噴水のように、壁一面に何十とたたきつけられた墨の「手形」だ。

なんのために描かれたのか、映画のなかではいろいろな仮説がたてられていたが、僕のなかにはそんな疑問はまったくわいてこなかった。人間は描く。描かずにはいられない。そのうねり、波、暴発が、火山のように荒々しく、と同時に微生物がうごめく繊細さで、薄闇のなかに^{*12}発露している。映画がまわっているあいだじゅう僕は、^③世界の外と内をくるくる飛び移った。そうしながら、人類

史上最高の画家の目を借り、岩をつらぬいて走る動物たちの躍動を、息をつめてみつめつづけた。

ネアンデルタール人、クロマニヨン人、現代人と、骨格や脳の容積で切り分け、僕たちは時間の上を、だんだん「進化」してきたとおもっているけれど、ほんとうにそうか。周囲を見回すと、家屋、自動車、庭木にブロック塀、そのむこうには橋、電柱。ヘリコプターが飛んでいく。この世はいま、人間がこしらえた「つくりもの」であふれている。ひよつとして、と立ち止まって思う、生のままの、むきだしの宇宙に触れるのがこわい、それで人類は身の回りに人工物をちりばめてきたのではないか。シヨウヴェ洞窟の画家の目、まったくの外界を暗闇の内側へ、^④正確に転写しようという勇氣は、現代では狂気の兆しとみなされるかもしれない。けれども彼には、ほんとうに、そのように見えたのだ。

ことばをおぼえ、ようやく使い始めた、うちの二歳の息子は、個人史でいえばちょうど X くらいにあたっているかもしれない。ことばで切り分けられる直前のおとなの手には負えない巨大な世界へ、幼児たちは臆することなく、堂々と、二足歩行をはじめたばかりの跳躍で、身を躍らせてかけこんでいく。

最近驚かされたのが、「きのう」ということばだ。

「きのう、こーべ、いってえ、ぎょーじゃ、たべてえ、ぶーぶー、のってえ、おいちかったん」

「きのう、とうきょうのお、おじいちゃん、おばあちゃん、ちんかんてん、のってえ、きょうと、ちたの」

「きのう、どぶちゅえん、バシユのってえ、いったの。おしゃかの、バシユ、やったの」

神戸で餃子を食べたのは半年前、東京の義父母が新幹線で京都に来たのは、一年前、大阪の天王寺動物園にバスでいったのは先週のことだった。それが彼のなかではすべて「きのう」となる。つまり、たった「いま」、この瞬間以外、過ぎ去ってしまった出来事はすべて「きのう」に属する。

自分がうまれる以前の時間、僕がうまれた四十数年前、江戸時代、何百年前、すべてが彼のなかでは、「きのう」のうちに収まって

しまう。自分の背中で巨大な風船のように「きのう」が果てしなくふくれあがり、目の前で、手のうちでは、たえず注がれる水のよ
うに「いま」が^{*13}潤沢にこぼれていく。直感でおもうのだけれど、きっと、息子の感覚のほうがただしいのだ。
きのう、名もない洞窟にかがり火をたき、一人の画家が^{*14}湾曲する壁面の前に立つ。きのう、画家の目が見ひらかれ、ゆっくり
とバイソンがふり向き、黒い馬がおもむろに頭をもたげる。きのう、ライオンがかけられる。きのう、シカたちが走りゆく。^⑤きのう描か
れた絵が、きのうまたあたらしい光を浴び、きのうを貫いて、「いま」を生きつつつける。

(いしいしんじ『そのように見えた』)

- (注) *1 劣化：質が悪くなること。 *2 ラスコ：フランスの地名。古代の洞窟壁画のあった場所。
*3 アルタミラ：スペインの地名。古代の洞窟壁画のあった場所。 *4 驚愕：非常に驚くこと。 *5 内奥：心の中。
*6 バイソン：大型の野生の牛。 *7 刹那：瞬間。 *8 デッサン：下絵。線描。
*9 ドガ：一八四三年生まれのフランスの画家。 *10 狩野探幽：一六〇二年生まれの江戸時代の画家。
*11 3D映像：立体的な映像。 *12 発露：表に現れること。 *13 潤沢：ものが豊富にあふれていること。
*14 湾曲：弓形に曲がること。

問一

——線部①「馬が生きていた」とありますが、どのように表現している作者は、洞窟壁画をどのようなものだと感じましたか。
本文中から二十字以内で書きぬきなさい。

問二

——線部②「三万などという物理的な数字をやすやす越えて」とありますが、それは洞窟壁画のどのような点をあらわして
いますか。二十字以内で答えなさい。

問三

——線部③「世界の外と内をくるくる飛び移った」とありますが、どういうことですか。その説明として最もふさわしいも
のを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 洞窟壁画に描かれた生命感あふれる動物を見ながら、外へ飛び出していきたい気持ちになった。
イ 自分の心の内側に狂気と勇気を感じながら、洞窟の外でただけしく活動する動物の姿を思い浮かべた。
ウ 生々しい迫力で描かれた洞窟壁画の動物に感動しながら、現代社会に生きる自分は恐怖を感じていた。
エ 洞窟壁画に描かれた動物の躍動する姿を見ながら、自然の中で動き回る野生の動物の姿を想像していた。
オ 現代社会に暮らす自分の周囲にあるさまざまな物と比較しながら、洞窟の外で躍動する野生の動物を想像し感動した。

問四

——線部④「正確に転写しようという勇氣は、現代では狂気の兆しとみなされるかもしれない」とありますが、なぜですか。
解答らんにあうように本文中から十六字で書きぬきなさい。

問五

——Xにあてはまる語句として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア きのう イ いま ウ 青春時代 エ 文明開化期 オ 石器時代

問六

——線部⑤「きのう描かれた絵が、きのうまたあたらしい光を浴び、きのうを貫いて、『いま』を生きつつつける」とありますが、
筆者はどのようなことを感じたのでしょうか。本文全体をふまえて説明しなさい。

